

災害と透析医療

(社) 日本透析医会

常務理事 戸澤修平

この度の大震災で被災された多くの方々に心からお見舞いを申し上げますと共に、避難し生き抜くことのできなかった多くの方々、未だ行方不明の方々に哀悼の意を捧げます。

「天災は忘れた頃に来る」との名言を故寺田寅彦先生は残されましたが、平成23年3月11日午後2時46分、1000年に一度といわれるような未曾有の東日本大震災が発生し、それに伴う大津波で壊滅的な打撃を受け、途方に暮れる被災者をさらに奈落の底に落とすような福島原発事故の発生は、被災者のみならず日本全土および地球規模の危機への発展をも危惧される状態となっている。また彼の随筆集の中に「人間は何度同じ災害にあっても決して利口にならぬものであることは歴史が証明する、云々」とあるが、今回の震災との類似性が指摘されている平安時代の貞観地震(869年)やスリーマイル島、チェルノブイリで手痛い経験をしているにもかかわらず、大災害を忘却の彼方に追いやり快樂に溺れている現代をみると、先達に見透かされた利口になれない我々がいることに気がつく。しかしながら、一方で我々はどんなに打ちのめされても知恵を持って、そこから這い上がり立ち直っていく歴史も見ている。

日本透析医会の事業の一つに災害時透析医療対策がある。この度の災害で当医会は、大規模災害対応に準備しホームページに公開されている「災害情報ネットワーク」と会員および関係者のための[joho_ml]を用い、被災透析患者の救済のための支援を行った。その中で従来の支援体制と違ったのは、被災透析患者の被災地外への遠隔地搬送(仙台⇒札幌)に航空機の使用があったことである。これには行政の応援があったことは当然であるが、当医会の災害対策委員会を中心とした会員相互の「報・連・相」体制が構築されていたこと、また当時、現地では壊滅的な崩壊でなすすべもない最悪の透析医療環境状態の中で医療関係者が一丸となって冷静に知恵を持って行動したこと、さらに受け入れ態勢側も医会および行政の多くの協力を得て支援体制が構築できたことが、このミッションの成功につながり、被災透析難民の発生を防ぐことができた。しかし、当医会としてこの支援体制は情報のやり取りの中でまだまだ多くの課題を残したが、今回のような大規模災害でとにかく透析難民の発生を阻止できたことは評価に値する。

振り返ってみると、この大震災が起きる前までは、透析医療で今後懸念される問題として「高齢化社会の透析医療」「過疎地の透析難民」「診療報酬と介護保険料の同時改正の影響」さらに全体の問題として「医療財政危機」など、透析医療にとって難問山積であり、その対応に苦慮しているところであったが、この災害で国全体が災害対策一色になり、すべてが先送りの状態になった。さらには、国そのものが財政危機にあり医療環境の整備は厳しい状況にある中で、国はこの大災害の復旧・復興に力点を移すのは必至であり、もはや透析患者に良い医療環境を整備し提供し続けることができるかどうかは、当医会がいかに頑張るのかにかかっているとんでもない。

本来、医療制度・福祉・教育などというものは国の根幹にかかわることであり、政権交代があってもその都度ぶれてはいけないものであるが、この度の震災において復旧・復興に対して国の方針が一本化されていない現状では、災害時医療対策の将来ビジョンが描かれているとは思えない憂うべき状況にある。

しかしながら、日本において災害後の復旧・復興は過去の歴史をみても必ず成し遂げられており、この大震災も時間はかかるが必ずや復旧し復興するものと思われる。透析医療界においては、この度の災害時に一部混乱はあったものの相互扶助・支援体制は機能したと思われるが、より盤石な体制の構築が必要である。幸い、日本透析医会は社団法人から公益社団法人への移行に伴い、新定款では以前より事業の中で行ってきた災害対策を「災害時における透析医療の確保に資する事業を行い」と目的の中に明記し公益事業の大きな柱の一つになったので、より具体的な体制の構築が期待できる。災害が発生することは不幸なことであるが、その不幸を乗り越えて災害対策体制を構築し、先達に笑われないためにも「鉄は熱いうちに打て」の今を大事にしたい。

最後に、災害時によく使われる「自助、共助、公助」があるが、まさしく日本透析医会は「共助」の部分での活躍であり、この度の大規模災害を経験し多くの医療関係者の結束の必要性を痛感した。そのためにも、多くの医療関係者が日本透析医会という同じ土俵に乗って、透析患者・透析医療のよりよい医療環境を作るべく共に活動していただきたいものである。